

龍潭譚

泉鏡花作

目次

- 一・躑躅か丘
- 二・鎮守の社
- 三・かくれあそび
- 四・あふ魔が時
- 五・大沼
- 六・五位鷺
- 七・九ツ訝
- 八・渡船
- 九・ふるさと
- 十・千呪陀羅尼

躑躅が丘

日は午こなり。
あらゝ木ぎのたらし
坂さかに樹きの陰かげもな

し。寺の門、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挟みて町の入口にはあたれど、のぼるに従ひて、たゞ畑ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき處に見ゆ。谷には菜の花残りたり。路の右左、躑躅の花の紅なるが、見渡す方、見返る方、いまを盛なりき。ありくにつれて汗少しいでぬ。

空よく晴れて一點の雲もなく、風あたゝかに野面を吹けり。

一人にては行くことなかれと、優しき姉上のいひたりしを、肯かで、しのびて來つ。おもしろきなめかな。山の上の方より一束の薪をかつぎたる漢おり來たれり。眉太く、眼の細きが、向さまに顛巻したる、額のあたり汗になりて、のし／＼と近付きつゝ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、

「危ないぞ／＼。」

といひ、ずてに眈に皺を寄せてさつ／＼と行き過ぎぬ。

見返ればハヤたら／＼さがりに、その肩躑躅の花

にかくれて、髪結ひたる天窓のみ、やがて山蔭に見
えずなりぬ。草がくれの徑遠く、小川流るゝ谷間の
畦道を、菅笠冠りたる婦人の、跣足にて鋤をば肩に
し、小さき女の兒の手をひきて彼方にゆく背姿ありしが、それも杉の樹立に入りたり。

行く方も躑躅なり。來し方も躑躅なり。山土のい
るもあかく見えたる、あまりのうつくしさに恐ろし
くなりて、家路に歸らむと思ふ時、わが居たる一株
の躑躅のなかより、羽音たかく、蟲のつと立ちて頬
を掠めしが、かなたに飛びて、およそ五六尺隔てた
る處に礫のありたる其わきにとゞまりぬ。羽をふる
ふさまも見えたり。手をあげて走りかゝれば、ぱつ
とまた立ち上がりて、おなじ距離五六尺ばかりのと
ころにとまりたり。そのまま小石を拾いあげて狙ひ
うちし、石はそれぬ。蟲はくるりと一ツはまりて、
また舊のやうにぞ居る。追ひかくれば迅くもまた遁
げぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほど
のあはひを置きてはキラ／＼とさゝやかなる羽ばた
きして、鷹揚に其その二すぢの細き鬚を上下にわづ
くりておし動かすぞいと憎さげなりける。

われは足踏して心いらてり。其居たるあとを踏み
にじりて、

「畜生、畜生。」

と呟きざま、躍りかゝりて八々と打ちし、拳はい
たづらに土によごれぬ。

渠は一足先なる方に悠々と羽づくろひす。憎しと
思ふ心を籠めて瞻りたれば、蟲は動かずなりたり。
つく／＼見れば羽蟻の形して、それよりもやゝ大
いなる、身はたゞ五彩の色を帯びて青みがちにかゞ
やきたる、うつくしさいはむ方なし。

色彩あり光沢ある蟲は毒なりと、姉上の教へたる
をふと思ひ出でたれば、打置きてす／＼と引返せ
しが、足許にさきの石の二ツに碎けて落ちたるより
俄かに心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒蟲を
ねらひたり。

このたびはあやまたず、したゝかうつて殺しぬ。
嬉しく走りつきて石をあはせ、ひたと打ひしぎて蹴
飛ばしたる、石は躑躅のなかをくゞり小砂利をさそ
ひ、ばら／＼と谷深くおちゆく音しき。

袂たもとのちり打ちうちはらひて空そらを仰あふげば、日脚ひあしやゝ斜なぐめに
なりぬ。ほか／＼とかほあつき日向ひなたに唇くちびるかわきて、
眼めのふちより頬ほのあたりむず痒がゆきこと限かぎりなかりき。

心こころ着つけば舊もと來きし方かたにはあらしと思おもふ坂道さかみちの異ことなる
方かたにわれはいつかおりかけ居ゐたり。丘をかひとつ越こえた
りけむ、戻もとる路みちはまたさきとおなじのぼりになりぬ。
見渡みわたせば、見みまはせば、赤土あかつちの道幅みちはせまく、うねり
／＼果はてしなきに、兩側りやうがはつゞきの躑躅つづじの花はな、遠とほき方かた
は前後ぜんごを塞ふさぎて、日ひかげあかく咲さき込こめたる空そらのいろ
の眞蒼まあをき下したに、イたむはわれのみなり。

鎮守の杜

坂さかは急きふならず長ながくもあらねど、一ひとつ盡つくればまたあ
らたに顯あひはる。起伏きふく恰あたかも大波おほなみの如ごとく打うち續つきて、いつ坦たん
ならむとも見みえざりき。

あまり倦うみたれば、一ひとツおりてのぼる坂さかの窪くぼに踞つひし、手てのあきたるまゝ何なにならむ指ゆびもて土つちにかきはじめぬ。さといふ字じも出で来きたり。くといふ字じも書かきたり。曲まがりたるもの、直すくなるもの、心こゝろの趣おもむくまゝに落らく書がしたり。しかなせるあひだにも、頬ほのあたり先さ刻きに毒どく蟲むしの触ふれたらむと覺おぼゆるが、しきりにかゆければ、袖そでもてひまなく擦こすりぬ。擦こすりてはまたもの書かきなどせる、なかにむつかしき字じのひとつ形かたちよく出で來きたるを、姉あねに見みせばやと思おもふに、俄にはかにその顔かほの見みたうぞなりたる。

立たちあがりてゆくてを見みれば、左さ右うより小こ枝えだを組くみてあはひも透すかで躑つ躑じ咲さきたり。日ひ影かげひとしほ赤あかうなりまさりたるに、手てを見みたれば掌たなせこに照てりそひぬ。

一いち文字もんじにかけのぼりて、唯と見みればおなじ躑つ躑じのだら／＼おりなり。走はしりおりて走はしりのぼりつ。いつまでか恚かくてあらむ、こたびこそと思おもふに違たがひて、道みちはまた蜿うねれる坂さかなり。踏ふ心こゝ地ち柔ちやほろかく小こ石いしのひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得堪へずなりたり。

再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きて居つ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なほ家ある處に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異らずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆふ日あざやかにぱつと茜さして、眼もあやに躑躅の花、たゞ紅の雪の降積めるかと疑はる。

われは涙の聲たかく、あるほど聲を絞りて姉をもとめぬ。一たび二たび三たびして、こたへやすると耳を澄せば、遙に瀧の音聞えたり。だうだふと響くなかに、いと高く冴えたる聲の幽に、

「もういゝよ、もういゝよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びといふものするあひ圖なることを認め得たる、一聲くりかへすと、ハヤきこえずなりしが、やう／＼心たしかに其の聲したる方にたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて眺おろせば、あまり雑作なしや、堂の瓦屋根、杉の樹

立のなかより見えぬ。かくてわれ踏迷ひたる紅の雪
のなかをばのがれつ。背後には躑躅の花飛び／＼に
咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし
時は一株も花のあかきはなくて、たそがれの色、境
内の手洗水のあたりを籠めたり。柵結ひたる井戸ひ
とつ、銀杏の古りたる樹あり、そがうしろに人の家
の土塀あり。此方は裏木戸のあき地にて、むかひに
小さき稲荷の堂あり。石の鳥居あり。木の鳥居あり。
この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鐵の輪
を嵌めたるさへ、心たしかに覺えある、こゝよりは
ハヤ家に近しと思ふに、さきの恐しさは全く忘れ果
てつ。たゞひとへにゆふ日照りそひたるつゝじの花
の、わが丈よりも高き處、前後左右を咲埋めたるあ
かき色のあかきがなかに、緑と、紅と、紫と、青白
の光を羽色に帯び毒蟲のキラ／＼と飛びたるさまの
廣き景色のみぞ、晝の如く小さき胸に匂がゝれける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救を姉にもとめしを、渠に認められしぞ幸なる。いふことを肯かで一人いで來しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ。優しき人のなつかしけれど、顔をあはせて謂ひまけむは口惜しきに。

嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に歸らむとはおもはず。ひとり境内にイみしに、わつといふ聲、笑ふ聲、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツより八ツまでなる兒の五六人前後に走り出でたり。こはかくれ遊びの一人が見いだされたるものぞとよ。二人三人走り來て、わが其處に立てるを見つ。皆瞳を集めしが、

「お遊びな、一所にお遊びな。」とせまりて勧めぬ。小家あちこち、このあたりに住むは、かたるといふものなりとぞ。風俗少しく異なれり。兒どもが親達の家富みたるも好き衣着たるはあらず、大抵跣足なり。三味線弾きて折々わが門に來るもの、溝川に鱒を捕ふるもの、附木、草履など鬻ぎに來るもの

だちは、皆この兒どもが母なり、父なり、祖母などなり。さるものとはともに遊ぶな、とわが友は常に戒めつ。然るに町方の者といへば、かたゐなる兒ども尊び敬ひて、頃刻もともに遊ばんことを希ふや、親しく、優しく勉めてすなれど、不斷は此方より遠ざかりしが、其時は先にあまり淋しくて、友欲しき念の堪へがたかりし其心のまだ失せざると、恐しかりしあとの樂しきとに、われは拒まずして頷きぬ。

兒どもはさゞめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返すとて、拳してさがすものを定めしに、われ其任にあたりたり。面を蔽へといふまゝにしつ。ひつそとなりて、堂の裏崖をさかさに落つる瀧の音だうだふと松杉の梢ゆふ風に鳴り渡る。かすかに、「もう可いよ、もう可いよ。」と呼ぶ聲、笏に響けり。眼をあくればあたり静まり返りて、たそがれの色また一際襲ひ來れり。大なる樹のすく／＼とならべるが朦朧としてうすぐらきなかに隠れむとす。

聲したる方をおもふ處には誰も居らず。こゝかし

こさがしたれど人らしきものあらざりき。

また舊の境内の中央に立ちて、もの淋しく贖しぬ。
山の奥にも響くべく凄じき音して堂の扉を鎖す音し
つ、鬨としてものも聞えずなりぬ。

親しき友にはあらず。常にうとましき兒どもなれば、かゝる機会を得てわれをば苦めむとや企みけむ。身を隠したるまゝ密に遁げ去りたらむには、探せばとて獲らるべき。益もなきことをと不圖ひ思ひうかぶに、うちすてゝ踵をかへしつ。さるにても萬一わがみいだすを待ちてあらばいつまでも出でくることを得ざるべし、それもまたはかり難しと、心迷ひて、とつ、おいつ、徒に立ちて困ずる折しも、何處より來りしとも見えぬ、暗うなりたる境内の、うつくしく掃いたる土のひろびろと灰色なせるに際立ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍に居て、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈高き女なりし、其手を懐にして肩を垂れたり。優しきこゑにて、

「此方へおいで。此方。」

といひて前に立ちて導きたり。見知りたる女にあ
らねど、うつくしき顔の笑をば含みたる、よき人と
思ひたれば、怪しまで、隠れたる兒のありかを教ふ
るとさとりたれば、いそ／＼と従ひぬ。

あふ魔が時

わが思ふ處に違はず、堂の前を左にめぐりて少し
ゆきたる突あたりに小さき稻荷の杜あり。青き旗、
白き旗、二三本其前に立ちて、うしろはたゞちに山
の裾なる雑樹斜に生ひて、杜の上を蔽ひたる、其下
のをぐらき處、孔の如き空地なるをソとめくばせし
き。瞳は水のしたゝるばかり斜にわが顔を見て動け
るほどに、あきらかに其心ぞ讀まれたる。

さればいさゝかもためらはで、つか／＼と杜の裏
をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。落葉、
朽葉堆く水くさき土のほひしたるのみ、人の氣
勢もせで、頸もとの冷かなるに、と胸をつきて見返
りたる、またゝくまと思ふ彼の女はハヤ見えざりき。
何方にか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思はずニ呀と叫びぬ。

人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、た
そがれの片隅には、怪しきもの居て人を惑はすと、
姉上の教へしことあり。

われは茫然として眼を（ニ）りぬ。足ふるひたれ
ば動きもならず、固くなりて立ちすくみたる、左手
に坂あり。穴の如く、其底よりは風の吹き出づると
思ふ黒闇々たる坂下より、ものゝのぼるやうなれば、
こゝにあらば捕へられむと恐しく、とかうの思慮も
なさで杜の裏の狭きなかににげ入りつ。眼を塞ぎ、
呼吸をころしてひそみたるに、四足のものゝ歩むけ
はひして、杜の前を横ぎりたり。

われは人心地もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさきの女のうつくしかりし顔、優かりし眼を忘れず。こゝをわれに教へしを、今にして思へばかくれたる兒どものありかにあらで、何等か恐しきものゝわれを捕へむとするを、こゝに潜め、助かるべしとて、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ。しばらくして小提灯の火影あかきが坂下より急ぎのぼりて彼方に走るを見つ。ほどなく引返してわがひそみたる社の前に近づきし時は、一人ならず二人三人連立ちて來りし感あり。

恰も其立留りし折から、別なる聲音、また坂をのぼりてさきのものと落合ひたり。

「おい／＼分らないか。」

「ふしぎだな、なんでも此邊で見たといふものがあるんだが。」

とあとよりいひたるはわが家につかひたる下男の聲に似たるに、あはや出でむとせしが、恐しきものゝ然はたばかりて、おびき出すにやあらむと恐しさは一しほ増しぬ。

「もう一度念のためだ、田圃の方でも廻つて見よう、お前も頼む。」

「それでは。」といひて上下にばら／＼と分れて行く。

再び寂としたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手をかけて眼ばかりと思ふ顔少し差出だして、外の方をうかゞふに、何ごともあらざりければ、やゝ落着きたり。怪しきものども、何とてやはわれをみいだし得む、愚なる、と冷かに笑ひしに、思ひがけず、誰ならむたまぎる聲して、あわてふためき遁ぐるがありき。驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の聲なりき。

大沼

「居ないツて私あ何うしやう、爺や。」

「根ツから居さつしやらぬことはござりますまいが、日は暮れまする。何せい、御心配なこんでござります。お前様遊びに出します時、帯の結めを丁とたゝいてやらつしやれば好いに。」

「あゝ、いつもはさうして出してやるのだけれど、けふはお前私にかくれてそツと出て行つたらうではないかねえ。」

「それはハヤ不念なこんだ。帯の結めさへ叩いときや、何がそれで姉様なり、母様なりの魂が入るもんだで魔めは何うすることもしえないでござす。」

「さうねえ。」とものかなしげに語らひつゝ、杜の前をよこぎりたまへり。走りいでしが、あまりおそかりき。

いかなればわれ姉上をまで怪みたる。

悔ゆれど及ばず、かなたなる境内の鳥居のあたりまで追ひかけたれど、早や其姿は見えざりき。

涙なみだぐみてイむ時とき、ふと見る銀杏いであんの木きのくらき夜の空そらに、大なる圓まるき影かげして茂しげれる下したに、女をんなの後姿うしろすがたありてわが眼まなこを遮さへりたり。

あまりよく似にたれば、姉上あねうへと呼ばよむとせしが、よしなきものに聲こゑかけて、なまじひにわが此處こゝにあるを知られむは、拙つたなきわざなればと思おもひてやみぬ。

とばかりありて、其姿そのすがたまたかくれ去さりつ。見みえずなればなほなつかしく、たとへ恐おそしきものなればとて、かりにもわが優やさしき姉上あねうへの姿すがたに化けしたる上うへは、われを捕とへてむごからむや。さきなるは然さもなく、いま幻まぼろしに見みえたるがまこと其人そのひとなりけむもわかざるを、何なにとて言いはかけざりしと、打泣うちなきしが、かひもあらず。

あはれさまノ、のものゝ怪あやしきは、すべてわが眼まなこのいかにかせし作用さようなるべし、さらずば涙なみだにくもりしや、術すべこそありけれ、かなたなる御手洗みたらしにて清きよめてみばやと寄りぬ。

煤すすけたる行燈あんどうの横長よこながきが一つ上ひとつへにかゝりて、ほとゝ

ぎすの畫と句など書いたり。灯をともしたるに、水はよく澄みて、青き苔むしたる石鉢の底もあきらかなり。手に掬ばむとしてうつむく時、思ひかけず見たるわが顔はそも、いかなるものぞ。覺えず叫びしが心を籠めて、氣を鎮めて、兩の眼を拭ひ、水に臨む。

われにもあらでまたとは見るに忍びぬを、いかでわれかゝるべき、必ず心の迷へるならむ、今こそ、今こそとわなゝきながら見直したる、肩をとらへて聲ふるはし、

「お、お、千里。えゝも、お前は。」と姉上のたまふに、縋りつかまくみかへりたる、わが顔を見たまひしが、

「あれ！」

といひて一足すさりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいひずてに衝と馳せ去りたまへり。

怪しき神のさま、このことしてなぶるわと、あまりのことに腹立たしく、あしずりして泣きに泣きつゝ、ひたばしりに追ひかけぬ。捕へて何をかなさ

むとせし、そはわれ知らず。ひたすらものゝ口惜し
ければ、とにかくもならばとてなむ。

坂もおりたり、のぼりたり、大路と覺しき町にも
出でたり、暗き徑も辿りたり、野もよこぎりぬ。畦
も越えぬ。あとをも見ずて駈けたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなか
に銀河の如く横はりて、黒き、恐しき森四方をかこ
める、大沼とも覺しきが、前途を塞ぐと覺ゆる蘆の
葉の繁きがなかにわが身體倒れたる、あとは知らず。

五位鷺

眼のふち清々しく、涼しき薰つよく薰ると心着く、
身は柔かき蒲團の上に臥したり。やゝ枕をもたげて
見る、竹縁の障子あけ放して、庭つゞきに向ひなる

山懐に、緑の草の、ぬれ色青く生茂りつ。其半腹にかゝりある巖角の苔のなめらかなるに、一挺はだか
蠟に灯ともしたる灯影すゞしく、笕の水むく／＼と湧きて玉ちるあたりに盥を据ゑて、うつくしく髪結
うたる女の、身に一絲もかけで、むかうざまにひたりて居たり。

笕の水は其たらひに落ちて、溢れにあふれて、地の窪みに流るゝ音しつ。

蠟の灯は吹くとなき山おろしにあかくなり、くらうなりて、ちら／＼と眼に映ずる雪なす膚白かりき。

わが寝返る音に、ふと此方を見返り、それと頷く状にて、片手を、ふちにかけて、片足を立て、盥のそとにいだせる時、颯と音して、鳥よりは小さき鳥の眞白きがひら／＼と舞ひおりて、うつくしき人の脛のあたりをかすめつ。其まゝおそれもなう翼を休めたるに、ざぶりと水をあびせざま莞爾とあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣もて其胸をば蔽へり。鳥はをどろきてはた／＼と飛去りぬ。

夜の色は極めてくらし、蠟を取りたるうつくしき
人の姿さやかに、庭下駄重く引く音しつ。ゆるやかに
縁の端に腰をおろすと、手に、手をつきそらして
掬向きさま、わがかほをば見つ。

「気分は癒つたかい、坊や。」
「といひて頭を傾けぬ。ちかまさりせる面だけかく、
眉あざやかに、瞳すゞしく、鼻や高く、唇の紅な
る、額つき頬のあたり臆たけたり。こは豫てわがよ
しと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人
ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人にはあ
らざれど、はじめて逢ひし方とは思はず、さりや、
誰にかあるらむとつく／＼みまもりぬ。」

またほゝゑみたまひて、
「お前あれは斑猫といつて大變な毒蟲なの。も
う可いね、まるでかはつたやうにうつくしくなつた、
あれでは姉様が見違へるのも無理はないのだもの。」
われも然あらむと思はざりしにもあらざりき。い
まはたしかにそれよと疑はずなりて、のたまふまゝ
に頷きつ。あたりのめづらしければ起きむとする夜

着ぎの肩かた、ながく柔やはらかにおさへたまへり。

「ぢつとしておいで、あんばいがわるいのだから、落おち着ついて、ね、氣きをしづめるのだよ、可いいかい。」

われはさからはで、たゞ眼めをもて答こたへぬ。

「どれ。」といひて立たつたる折をり、のし／＼と道みち芝しばを踏ふむ音おとして、つゞれをまとうたる老おやぢ夫ぢの、顔かほの色いろいと赤あかきが縁えんぢか近ちかう入はり來きつ。

「はい、これはお兒こさまがござらつせえたの、可愛かほいいお兒こぢや、お前まへ様さまも嬉うれしかる。は／＼、どりや、またいつものを頂いたきましょか。」

腰こしをな／＼めにうつむきて、ひつたりとかの筧かけひに顔かほをあて、口くちをおしつけてごつ／＼とたてつゞけにのみたるが、ふツといきを吹ふきて空そらを仰あふぎぬ。

「やれ／＼甘あまいことかな。はい、參まゐります。」
と踵きびすを返かへすを、此こなた方たより呼よびたまひぬ。

「ぢいや、御ご苦く勞らうだが。また來きておくれ、この兒こを返かへさねばならぬから。」

「あい／＼。」
と答へて去る。山風颯とおろして、彼の白き鳥また翔ちおりつ。黒き盪のふちに乗りて羽づくろひして静まりぬ。

「もう、風邪を引かないやうに寝させてあげよう、どれそんなら私も。」とて静に兩戸をひきたまひき。

九ツ訝

やがて添臥したまひし、さきに水を浴びたまひし故にや、わが膚をり／＼慄然たりしが何の心もなうひしと取継りまゐらせぬ。あとを／＼といふに、をさな物語二ツ三ツ聞かせ給ひつ。やがて、
「一ツ訝、坊や、二ツ訝といへるかい。」

「二ツ餅。」

「三ツ餅、四ツ餅といつて御覧。」

「四ツ餅。」

「五ツ餅。そのあとは。」

「六ツ餅。」

「さう／＼七ツ餅。」

「八ツ餅。」

「九ツ餅——こゝはね、九ツ餅といふ處なの。」

「さあもうおとなにして寝るんです。」

背に手をかけ引寄せて、玉の如き其乳房を、ふく

ませたまひぬ。露に白き襟、肩のあたり鬢のおくれ

毛はら／＼とぞみだれたる、かゝるさまは、わが姉

上とは太く違へり。乳をのまむといふを姉上は許し

たまはず。

ふところをかいさぐれば常に叱りたまふなり。母

上みまかりたまひてよりこのかた三年を経つ。乳の

味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれに

は似ざりき。垂玉の乳房たゞ淡雪の如く含むと舌に

きえて觸るゝものなく、すゞしき唾のみぞあふれい

でたる。

軽く背をさすられて、われ現になる時、屋の棟、天井の上と覺し、凄まじき音してしばらくは鳴りも止まず。こゝにつむじ風吹くと柱動く恐しさに、わなゝき取つくを抱きしめつゝ、

「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍しておくれよ、いけません。」

とのたまへば、やがてぞ静まりける。

「恐くはないよ。鼠だもの。」

とある、さりげなきも、われはなほ其響のうちにものゝ叫びたる聲せしが耳に残りてふるへたり。

うつくしき人はなかばのりいでたまひて、とある
蒔繪ものゝ手箱のなかより、一口の守刀を取出し
つゝ鞆ながら引そばめ、雄々しき聲にて、

「何が来てももう恐くはない、安心してお寝よ。」
とのたまふ、たのもしき状よと思ひてひたと其胸に
わが顔をつけたるが、ふと眼をさましぬ。残燈暗く
床柱の黒うつやゝかにひかるあたり薄き紫の色籠め
て、香の薫残りたり。枕をはづして顔をあげつ。顔

に顔をかほもたせてゆるく閉とぢたまひたる眼めの睫毛まつげかぞふるばかり、すや／＼と寝ね入りて居ゐたまひぬ。ものいはむとおもふ心こころおくれて、しばし瞻みまりしが、淋さびしさにたへねばひそかに其唇そのくちびるに指ゆびさきをふれて見みぬ。指ゆびはそれで唇くちびるには届とかでなむ、あまりよくねむりたまへり。鼻はなをやつまゝむ眼めをやおさむとまたつく／＼と打うちまもりぬ。ふと其鼻頭そのはなざきをねらひて手てをふれしに空くうを捻ひねりて、うつくしき人ひとは雛ひなの如ごとく顔かほの筋すじひとつゆるみもせざりき。またその眼めのふちをおしたれど水晶すいしやうのなかなるものゝ形かたちを取とらむとするやう、わが顔かほは其そのおくれげのはしに頬ほをなでらるゝまで近々ちか／＼とありながら、いかにしても指ゆびさきは其顔そのかほに届とかざるに、はては心こころいれて、乳ちくの下したに面おもてをふせて、強つよく額ひたひもて壓おしたるに、顔かほにはたゞあたゝかき霞かすみのまふとばかり、のどかにふは／＼とさはりしが、薄葉うすえふ一重ひとへの支さふるなく着つけたる額ひたひはつと下したに落おち沈しづむを、心着こころづけば、うつくしき人ひとの胸むねは、もとの如ごとく傍かたはらにあをむき居ゐて、わが鼻はなは、いたづらにおのが膚はだにぬくまりたる、柔やわらき蒲團ふとんに埋うれて、をかし。

渡船

夢幻ともわかぬに、心をしづめ、眼をさだめて見
たる、片手はわれに枕させたまひし元のまゝ柔かに
力なげに蒲團のうへに垂れたまへり。

片手をば胸にあてゝ、いと白くたをやかなる五指
をひらきて黄金の目貫キラ／＼とうつくしき鞞の塗
の輝きたる小さき守刀をしかと持つともなく乳のあ
たりに落して据ゑたる、鼻たかき顔のあをむきたる、
唇のものいふ如き、閉ぢたる眼のほゝ笑む如き、髪
のさら／＼したる、枕にみだれかゝりたる、それも
違はぬに、胸に劍をさへのせたまひたれば、亡き母
上の爾時のさまに紛ふべくも見えずなむ、コハこの
君もみまかりしよとおもふいまはしさに、はや取除
けなむと、胸なる其守刀に手をかけて、つと引く、

せつばゆるみて、青き光眼を射たるほどこそあれ、
いかなるはずみにか血汐さとほとばしりぬ。眼もく
れたり。した／＼とながれにじむをあなやと兩の拳
もてしかとおさへたれど、留まらで、たふ／＼と音
するばかりぞ淋漓としてながれつたへる、血汐のく
れなみ衣をそめつ。うつくしき人は寂として石像の
如く静なる鳩尾のしたよりしてやがて半身をひたし
盡しぬ。おさへたるわが手には血の色つかぬに、燈
にすかす指のなかの紅なるは、人の血の染みたる色
にはあらず、訝しく撫で試むる掌の其血汐にはぬれ
もこそせね、こゝろづきて見定むれば、かいやりし
夜のものあらはになりて、すゞしの絹をすきて見ゆ
る其膚にまとひたまひし紅の色なりける。いまはわ
れにもあらで聲高に、母上、母上と呼びたれど、叫
びたれど、ゆり動かし、おしうごかしゝたりしが、
効なくてなむ、ひた泣きに泣く／＼いつのまにか寝
たりと覺し。顔あたゝかに胸をおさるゝ心地に眼覺
めぬ。空青く晴れて日影まばゆく、木も草もてら／
＼と暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫の背に負は

れて、とある山路やまぢを行ゆくなりけり。うしろよりは彼かのうつくしき人ひとしたがひ來きましぬ。

さてはあつらへたまひし如ごとく家に送おくりたまふならむと推おしはかるのみ、わが胸むねの中なかはすべて見みすかすばかり知しりたまふやうなれば、わかれの惜せしきも、このいぶかしきも、取出とりいでゝいはむは益やくなし。教をしふべきことならむには、彼方かなたより先まきんじてうちいでこそしたまふべけれ。

家に歸かへるべきわが運うんならば、強しひて止とまらむと乞こひたりとて何なにかせん、さるべきいはれあればこそ、と大人おとなしう、ものもいはでぞ行ゆく。

斷崖だんがいの左石さいしうに聳そびえて、點滴てんてき聲こゑする處ところありき。雜草ざっそう高たかき徑こみちありき。松柏まつかしはのなかを行ゆく處ところもありき。きゝ知らぬ鳥とりうたへり。褐色かつしやくなる獸けものありて、をりノ、叢くさむすぶに躍をどり入いりたり。ふみわくる道みちにもあらざりしかど、去年こぞの落葉道おちばみちを埋うづみて、人多ひとほおく通かよふ所ところとしても見みえざりき。

をぢは一挺いちていの斧のを腰こしにしたり。れいによりてのし

／＼とあゆみながら、茨など生ひしげりて、衣の袖をさへぎるにあへば、すか／＼と切つて拂ひて、うつくしき人を通し参らす。されば山路のなやみなく、高き塗下駄の見えがくれに長き裾さばきながら來たまひつ。

かくて大沼の岸に臨みたり。水は漫々として藍を湛へ、まばゆき日のかげも此處の森にはさゞで、水面をわたる風寒く、颯々として聲あり。をぢはこゝに來てソとわれをおろしつ。はしり寄れば手を取りて立ちながら肩を抱きたまふ、衣の袖左石より長くわが肩にかゝりぬ。

蘆間の小舟の纜を解きて、老夫はわれをかゝへて乗せたり。一緒ならではと、しばしむづかりたれど、めまひのすればとて乗りましたまはず、さらばとのたまふはしに棹を立てぬ。船は出でつ。わつと泣きて立上りしがよるめきてしりみに倒れぬ。舟といふものにはゝじめて乗りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後に居たまへりともふ人の大なる環にまはりて前途なる汀に居たまひき。いかにして渡し越し

たまひつらむと思ふときハヤ左手なる汀に見えき。
見る／＼右手なる汀にまはりて、やがて舊のうしろ
に立ちたまひつ。箕の形したる大なる沼は、汀の蘆
と、松の木と、建札と、其傍なるうつくしき人と
もともに緩き環を描いて廻轉し、はじめは徐ろにま
はりしが、あと／＼急になり、疾くなりつ、くるく
る／＼と次第にこまかくまはる／＼、わが顔と一尺
ばかりへだゝりたる、まぢかき處に松の木にすがり
て見えたまへる、とばかりありて眼の前にうつくし
き顔の臆たけたるが莞爾とあでやかに笑みたまひし
が、その／＼ちは見えざりき。蘆は繁く丈よりも高き
汀に、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

をぢはわれを扶けて船より出だしつ。また其背を

向^むけたり。

「泣^なくでねえ／＼。もうぢきに坊^ぼツさまの家^{うち}ぢや。」と慰^{なぐさ}めぬ。かなしさはそれにはあらねど、いふもかひなくてたゞ泣^なきたりしが、しだいに身^みのつかれを感じ^{かん}て、手^ても足^{あし}も綿^{わた}の如^{ごと}くうちかけらるゝやう肩^{かた}に負^おはれて、顔^{かほ}を垂^たれてぞともなはれし。見^み覺^{あほ}えある板^{いた}塀^{べい}のあたりに來^きて、日^ひのやゝくれかゝる時^{とき}、老夫^{をぢ}はわれを抱^{いだ}き下^{おろ}して、溝^{みぞ}のふちに立^たたせ、ほく／＼打^{うち}ゑみつゝ、慇^{いん}懃^{ぎん}に曾^そ釋^{しゃく}したり。

「おとなにしさつしやりませ。はい。」
といひずてに何^{いづ}地^ちゆくらむ。別^{わか}れはそれにも惜^をしかりしが、あと追^おふべき力^{ちから}もなくて見^みおくり果^はてつ。指^さす方^{かた}もあらでありくともなく歩^ほをうつすに、頭^{かしら}ふら／＼と足^{あし}の重^{おも}たくて行^ゆ惱^{なや}む、前^{まへ}に行^ゆくも、後^{うし}ろに歸^{かへ}るも皆^{みな}見^み知^し越^このものなれど、誰^{たれ}も取^とりあはむとはせで往^ゆきつ來^{きた}りつす。さるにてもなほものありげにわが顔^{かほ}をみつゝ行^ゆくが、冷^やかに嘲^{あざけ}るが如^{ごと}く憎^{にく}さげなるぞ腹^{はら}立^たしき。おもしろからぬ町^{まち}ぞとばかり、足^{あし}はわれ知らず向^む直^{なほ}りて、とぼ／＼とまた山^{やま}ある方^{かた}にあるき出^{いだ}しぬ。

けたゝましき聲音あしおとして驚搥わしつかみに襟えりを搥つかむものあり。

あなやと振返ふりかへればわが家の後見うしろみせる奈四郎なしらうといへる
力逞ちからたくましき叔父おぢの、凄まじき氣色けしきして、

「つまゝれめ、何處どこをほつづく。」と喚わめきざま、
引立ひつたてたり。また庭にはに引出ひきいだして水みづをやあびせられむ
かと、泣叫なきさけびてふりもぎるに、おさへたる手てをゆる
べず、

「しつかりしろ。やい。」

とめくるめくばかり背せを拍うちて宙ちゆうにつるしながら、
走りはして家に歸かへりつ。立騒たちさわぐ召めしつかひどもを叱しかりつも
細引ほそびきを持もて來こさせて、しかと兩手りやうてをゆはへあへず奥おく
まりたる三疊さんでふの暗くらき一室ひとまに引立ひつたてゆきて、其そのまゝ柱はしら
に縛いましめたり。近ちかく寄よれ、喰くひさきなむと思おもふのみ、齒は
がみして睨にらまへたる、眼めの色いろこそ怪あやしくなりたれ、
逆さかつりたる毗まなしりは憑つきものゝわざよとて、寄よりたかり
て口々くちくちにのゝしるぞ無念むねんなりける。

おもての方かたさゞめきて、何處いづくにか行ゆき居をれる姉上あねうへ
歸かへりましたと覺おぼし、襖ふすまいくつかぱたノゝと音おとしてハ
ヤこゝに來きたまひつ。叔父おぢは室しつの外そとにさへぎり迎むかへ
て、

「ま、やつと取返したが、縄を解いてはならんぞ。もう眼が血走つて居て、すぎがあると駈け出すぢや。魔どのがそれしよびくでの。」

と戒めたり。いふことよくわが心を得たるよ、然り、隙だにあらむにはいかでかこゝにとゞまるべき。

「あ。」とばかりにいらへて姉上はまるび入りに、ひしと取着きたまひぬ。ものはいはでさめ／＼とぞ泣きたまへる、おん情手にこもりて抱かれたるわが胸絞らるゝやうなりき。

姉上の膝に臥したるあひだに、醫師來りてわが脈をうかゞひなどしつ。叔父は醫師とゞもに彼方に去りぬ。

「ちさや、何うぞ氣をたしかにもつておくれ。もう姉様は何うしやうね。お前、私だよ。姉さんだよ。ね、わかるだらう、私だよ。」

といきつく／＼、ぢつとわが顔を見まもりたまふ、涙痕したゝるばかりなり。

其心の安んずるやう、強ひて顔つくりてニツコと笑うて見せぬ。

「おゝ、薄氣味が悪いねえ。」
と傍にありたる奈四郎の妻なる人呟きて身ぶるひしき。

やがてまた人々われを取巻きてありしことゞも責むるが如くに問ひぬ。くはしく語りて疑を解かむとおもふに、をさなき口の順序正しく語るを得むや、根問ひ、葉問ひするに、一々説明かさむに、しかもわれあまりに疲れたり。うつゝ心に何をかいひたる。

やうやくいましてめはゆるされたれど、なほ心の狂ひたるものとしてわれをあしらひぬ。いふこと信ぜられず、すること皆人の疑を増すをいかにせむ。ひとと取籠めて庭にも出さで日を過しぬ。血色わるくなりて瘦せもしつとて、姉上のきづかひたまひ、後見の叔父夫婦にはいとせめて秘しつゝ、そとゆふぐれを忍びて、おもての景色見せたまひしに、門邊にありたる多くの兒ども我が姿を見ると、一齊に、アレさらはれものゝ、氣狂の、狐つきを見よやといふゝ、砂利、小砂利をつかみて投げつくるは不斷親しかりし朋達なり。

姉上は袖もてわれを庇ひながら顔を赤うして遁げ
入りたまひつ。人目なき處にわれを引据ゑつと見る
まに取つて伏せて、打ちたまひぬ。

悲しくなりて泣出せしに、あわたゞしく背をばさ
すりて、

「堪忍しておくれよ、よ、こんなかはいさうな
ものを。」

といひかけて、
「私あもう氣でも違ひたいよ。」としみ／＼と
掻口説きたまひたり。いつのわれにはかはらじを、
何とてさはあやまるや、世にたゞ一人なつかしき姉
上までわが顔を見るごとに、氣を確に、心を鎮めよ、
と涙ながらいはるゝにぞ、さてはいかにしてか、心
の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむやう
其毎になりまさりて、果はまことにものくるはしく
もなりもてゆくなる。

たとへば怪しき絲の十重二十重にわが身をまとふ
心地しつ。しだい／＼に暗きなかに奥深くおちいり
てゆく思あり。それをば刈拂ひ、遁出でむとするに

其術なく、すること、なすこと、人見て必ず、眉を
顰め、嘲り、笑ひ、卑め、罵り、はた悲み憂ひなど
するにぞ、氣あがり、心激し、たゞじれにじれて、
すべてのもの皆われをはらだゝしむ。

口惜しく腹立たしきまゝ身の周囲はこと／＼く
敵ぞと思はるゝ。町も、家も、樹も、鳥籠も、はた
それ何等のものぞ、姉とてまことの姉なりや、さき
には一たびわれを見て其弟を忘れしことあり。塵一
つとしてわが眼に入るは、すべてものゝ化したるに
て、恐しきあやしき神のわれを惱まさむとて現じた
るものならむ。さればぞ姉がわが快復を祈る言もわ
れに心を狂はすやう、わざと然はいふならむと、一
たびおもひては堪ふべからず、力あらば恣にともか
くもせばやせよかし、近づかば喰ひさきくれむ、蹴
飛ばしやらむ、搔むしらむ、透あらばとびいでゝ、
九ツ劔とをしへたる、たふときうつくしきかのひと
の許に遁げ去らむと、胸の湧きたつほどこそあれ、
ふたゝび暗室にいましめられぬ。

千呪陀羅尼

毒ありと疑へばものも食はず、薬もいかでか飲まむ、うつくしき顔したりとて、優しきことをいひたりとて、いつはりの姉にはわれことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものとしいへば、たけりくるひ、罵り叫びてあれたりしが、つひには聲も出でず、身も動かず、われ人をわきまへず心地死ぬべくなれりしを、うつら／＼昇きあげられて高き石壇をのぼり、大なる門を入りて、赤土の色きれいに掃きたる一條の道長き、右左、石燈籠と石榴の樹の小さきと、おなじほどの距離にかはる／＼、續きたるを行きて、香の薰しみつきたる太き圓柱の際に寺の本堂に据えられつ、ト思ふ耳のはたに竹を破る響きこえて、僧ども五三人一齊に聲を揃へ、高らかに誦する聲耳を聳するばかり喧ましき堪ふべからず、禿顛ならび居る木のはしの法師ばら、何をかすると、拳をあげて一人の天窓をうたむとせしに、一幅の青き光颯と窓を射て、水晶の念珠瞳をかすめ、ハツシと胸をうちたるに、ひるみて踞まる時、若僧圓柱をいざり出でつゝ、つい居て、サラ／＼と金欄の帳を絞る、燦欄

たる御厨子のなかに尊き像こそ拜まれたれ。一段高
まる經の聲、トタンにはたゝがみ天地に鳴りぬ。

端嚴微妙のおんかほばせ、雲の袖、霞の袴ちら／
と瓔珞をかけたまひたる、玉なす胸に纖手を添へ
て、ひたと、をさなごを抱きたまへるが、仰ぐ／＼
瞳うごきて、ほゝゑみたまふと、見たる時、やさし
き手のさき肩にかゝりて、姉上は念じたまへり。

瀧や此堂にかゝるかと、折しも雨の降りしきりつ。
渦いて寄する風の音、遠き方より呻り來て、どつと
満山に打あたる。

本堂青光して、はたゝがみ堂の空をまるびゆくに、
たまぎりつゝ、今は姉上を頼までやは、あなやと膝
にはひあがりて、ひしと其胸を抱きたれば、かゝる
ものをふりすてむとはしたまはで、あたゝかき腕は
わが背にて組合はされたり。さるにや氣も心もよわ
／＼となりもてゆく、ものを見る明かに、耳の鳴る
がやみて、恐しき吹降りのなかに陀羅尼を呪する聖
の聲々さわやかに聞きとられつ。あはれに心細くも

の凄すこきに、身みの置處おきてころあらずなりぬ。からだひとつ消
えよかしと兩手りやうてを肩かたに縋すがりながら顔かほもて其胸そのむねを押し
わけたれば、襟えりをば搔かきひらきたまひつゝ、乳ちの下した
にわがつむり押入おしいれて、兩袖りやうそでを打うちかさねて深くわが
背せを蔽おほひ給たまへり。御佛みほとけの其そのをさなごを抱いだきたまへる
も斯かくこそと嬉うれしきに、おちゐて、心地こゝちすが／＼し
く胸むねのうち安やすく平たいらになりぬ。やがてぞ呪じゆもはてた
る。雷らいの音おとも遠とほざかる。わが背せをしかと抱いだきたまへ
る姉上あねうへの腕かひなもゆるみたれば、ソと其懷そのぶとこより顔かほをい
してこは／＼其顔そのかほをば見み上げつ。うつくしさはそ
れにもかはらはらでなむ、いたくもやつれたまへりけり。
雨風あめかぜのなほはげしく外あそでをうかゞふことだにならざる、
静しずまるを待まてば夜よもすがら暴通あれとほしつ。家いへに歸かへるべく
もあらねば姉上あねうへは通夜つやしたまひぬ。其一夜そのいちやの風雨ふううに
て、くるま山の山やま中さんちゆう、俗ぞくに九ツここのたまたまといひたる谷たに、あ
けがたに杣そまのみいだしたるが、忽たちまち淵ふちになりぬとい
ふ。

里さとの者もの、町まちの人ひと皆みな舉こぞりて見みにゆく。日ひを經へてわれ
も姉上あねうへとゞもに來きたり見みき。其日そのひ一天いつてんうらゝかに空そらの
色いろも水みづの色いろも青あをく澄すみて、軟風なんふうおもむるに小波さなみわた

る淵ふちの上うへには、塵ちり一ひと葉はの浮うかべるあらで、白しろき鳥とりの翼つばき
廣ひろきがゆたかに藍らん碧へきなる水すい面めんを横よこぎりて舞まへり。
すさまじき暴あらし風ふう雨うなりしかな。此この谷たにもと藥やげん研けんの如ごと
き形かたちしたりきとぞ。

幾いく株かぶとなき松まつ柏かしはの根ねこそぎになりて谷たに間あひに吹ふ倒きたさ
れしに山さん腹ぶくの土つち落おちたまりて、底そこをながるゝ谷たに川がわを
せきとめたる、おのづからなる堤てい防ぼうをなして、凄すきま
じき水みづをば湛たへつ。一ひとたびこのところ決けつ潰くわいせむか、
城じやうの端はなの町まちは水み底そこの都みやことなるべしと、人ひと々々の恐おそれま
どひて、怠おこらず土つちを装もり石いしを伏ふせて豎かたき堤てい防ぼうを築きず
しが、恰あたも今いまの關せき屋や少せう将じやうの夫ふ人じん姉あね上うへ七しちの時ときなれば、
年としつもりて、嫩ふたはなりし常と磐は木ぎも八や丈たけのびつ。草くさ生お
ひ、苔こけむして、いにしへよりかゝりけむと思おもひ紛まがふ
ばかりなり。

あはれ礫つぶてを投とうずる事ことなかれ、うつくしき人ひとの夢ゆめや
驚おどかさむと、血け氣つきなる友とものいたづらを叱しかり留とめつ。
年とし少わかく面おも清てきよき海かい軍ぐんの少せう尉ゐ候こう補ほ生せいは、薄はく暮ぼ暗あん碧へきを湛たへ
たる淵ふちに臨のぞみて蕭しゆ然ぜんとせり。

【完】